

争論 文化事業、助成か自立か

「儲かる文化」と「儲からない文化」 文楽協会問題を考える

木津川 計

(『上方芸能』発行人)



大阪は人形が恋を語る町

川柳家でもあった落語家・露の五郎さんの句だ。小さな手を合わす人形の恋に大阪人は喜んだり涙したりして文楽を愛し続けてきた。

竹本義太夫が近松門左衛門と共に文楽を生み出し、育てて三百年余、人形劇では世界最高水準とされて、大阪の誇るべき伝統芸能になった。

人間が備えている格、それを人格と私たちはとらえてきた。同様に、都市にも格があって、それを私は都市格と呼んできたものだ。誰だって高い都市格の都市に憧れを持つ。出来得れば、そんな都市に住みたいと願う。

そんな都市格の高低を定める条件は次の三つといえよう。

- 1、文化のストック
- 2、景観の文化性
- 3、発信する情報

1と2はそのありなしが問われる。文化のストックの豊かな都市の都市性は高い。景観の文化性、即ち、眺めるに足る景観に恵まれた都市も同様である。3について敷衍するなら、どんな都市も全国、全世界に発信する情報がある。その内容が魅力的であるか、逆に響きを買うかで都市性は高くも低くもなるのである。

関西主力の三都、京阪神の都市格順位を定めるなら、ほとんどの人が京都―神戸―大阪の順と答える。

なぜ京都が一位なのか。京都は都市格の条件1、を満たして文化のストックが豊富だ。神社仏閣の多さ、それに華道・池坊の地元である。加えて、裏千家・表千家・武者小路三千家を擁する茶道の都でもある。

また京都は大学を多く有した学術研究都市でもある。ノーベル賞の受賞者は東京より京都の方が多い。要するに京都は文化のストックが豊富だから都市格が高い。

2の景観の文化性を眺めよう。京都は「布団着て寝たる姿や東山」の景観をどこからも眺められる。市の中心部を清流の鴨川が流れ、解禁になると、三条、四条大橋から鮎を釣る人を見おろすことができる。

観光シーズンになると、JR 東海はきまって「そうだ 京都、行こう。」のポスターを全国の駅に貼り出す。国内外から観光客を集める京都は、だから都市格が高い。

それに京都は、3の発信する情報、その内容が吸引力を持っている。なにしろ千年の古都だから年中歴史的諸行事で回転している。四月は花街の踊りが次つぎ競われる。五月は葵祭、六月は京都新能、七月は祇園祭、八月に大文字、十月は時代祭…、それ以外の月も何かの行事が行われている。かくして京都の都市格は一位と高い。

神戸が二位な訳はこうだ。神戸は幕末まで小さな漁村だったから、文化のストックは少ない。が、2の景観の文化性ですぐれているのだ。六甲の青い山脈、坂の北野町界隈、そしてミナト町・神戸。昼も夜も "

港が見える丘"はロマンチックなムードを
かもし出す。

それに神戸は発信する情報がおしゃれだ
から、神戸ワイン、神戸ルミナリエ、神戸
カーニバル…、魅力的な情報が多い。だから
都市格順位が二番目になるのだ。

すると、大阪は残念ながら三番目になり、
憧れの都市とは言い難くなる。無論、大阪
はオモロイ都市で明るく、賑やかで、食べ
物はおいしく、人情も厚い、というプラス
評価も多い。

が、全体としての大阪観はどういうもの
か。一例だけ挙げるのも、ここに言い尽く
されているからだ。『大阪人と日本人』(藤
本義一+丹波元著、PHP 文庫)が大阪人
観を次のように伝えている。

「ガラが悪い、下品、騒がしい、怖い町、
せつち、厚顔無恥、脂ぎっている。抜け
目ない、ケチ、守銭奴、食い倒れ、際限も
なく誉め言葉にならない表現を並べ立てら
れるのが大阪及び大阪人だ。」

このような大阪および大阪人観が全国に
出回り、社会化しているのである。「これ
らのすべては、マスメディアによって歪め
て伝えられたステレオタイプ的大阪人像で
ある」(前掲書) こと言うまでもない。

大阪といえば、いまや「タコ焼き・吉本・
タイガース」に集約される矮小化された大
阪観にとらわれたら、京料理に勝るとも劣
らない日本料理や、大阪のシティホテルが
誇る西洋料理は念頭に置かれぬ。

「上方芸能イコール吉本」に局限され
ると、世界遺産宣言を受けた文楽、あるいは
坂田藤十郎を頂点とする上方歌舞伎、創流
二百年を超えた山村流が伝える上方舞の伝
統なども目に入りにくい。

スポーツではサッカーのガンバもセレッ
ソも活躍しているのに脇にやられる。偏っ
ていびつ、極めて一面的な大阪観が牢固と

して崩れないどころか、大阪人自身がステ
レオタイプ化された大阪観にとらわれている
のである。

そののみか、呪縛されたような自虐的な
大阪(人)観に陥り、抜け出せないのである。
次の表を見ていただきたい。データの古さ
が申し訳ないが、事情はほとんど変わって
いないと思えるのでご紹介する。

1999 年に行われた、大阪市内の企業に
勤務するサラリーマンと OL510 人を対象
にした調査結果を『関東と関西 - おもしろ
100 番勝負』(日本博学倶楽部、PHP 文庫)
が伝えている (表参照)。

	東京 (%)	大阪 (%)
ネアカ度 (明るい感じ)	22.4	84.9
おもしろ度	38.0	78.4
あたたか度 (人情味)	2.7	82.7
おいしさ (食物豊か)	8.0	85.7
ダサイ度 (古臭い)	4.7	23.9
ワール度 (国際性)	73.9	9.3
イマイ度 (現代感覚)	76.5	17.8
インテリジェンス (知性)	42.7	1.2
ファッション度	69.8	27.8
情報発信度 (新情報入手)	92.5	27.5

ネアカ度、おもしろ度、あたたか度、お
いしさなどで大阪が東京より優位なのはう
なづけるが、ファッション度、情報発信度、
イマイ度 (現代感覚)、ダサイ度 (古臭い)
などで劣位にあることが自覚されている。

問題はインテリジェンス度 (知性) であ
る。東京の 42.7 に対し、大阪はわずかに 1.2
でしかないのだ。単純に解するなら 100 人
の大阪人中、大阪人に知性があると思う人
間は、実に一人しかいないのである。極論
するならアホばっかりの犇めく都市、それ
が大阪だと大阪人にとらえられているので
ある。

すべては大阪の都市格の低さに起因し
て、大阪は憧れの都市でなくなっているの

である。なぜ都市格が三位なのか。京都に比べ文化のストックが乏しい。二番目の景観の文化性も京都、神戸に比べ低いのである。それに三番目の発信する情報でも、大阪はロクでもなく、響きを買うような情報を多く発信してきたのである。

簡単に、年代毎の発信内容とそれによって描かれるようになった大阪イメージを列記すれば次のような推移である。

- 1960年代－"ど根性"の発信過多による
"ど根性"都市
- 1970年代－大日本ドケチ教教祖の活躍
による"どケチ"都市
- 1980年代－グリコ森永事件と豊田悪徳
商法による犯罪都市
- 1990年代－ワースト記録のラッシュと
横山ノック知事の破廉恥事件による破廉恥都市
- 2000年代－東京に本社を移す大企業と
衰弱する都市力（経済力）
による憂愁都市

大阪は難しい局面に立たされているのである。都市格を規定する三つの条件とも京都、神戸に引き離されているところへ橋下市長による文楽への助成削減指示が出され、混乱が始まったのである。

その混乱は大阪の都市格をさらに低下させる重大事態をも招いたのである。

文楽を維持する財政事情について初めに述べておこう。平成22年度の実績では、文楽を運営する文楽協会の事業活動収入は7億6,588万円で、その内、公演収入が8割、補助金、助成金は2割（国庫が5,500万円、大阪府は3,600万円だった助成金を橋下府政で2,070万円に減額、大阪市が5,200万円、芸術文化振興会が2,850万円、放送文化基金180万円）で維持されているのである。

橋下市長（大阪府知事から2011年12月、大阪市長に転身）は、その直後から文楽へ

の市補助金の削減を表明、12年6月には5,200万円から25%減の3,900万円に削減方針を表明、実際に削ったのである。

橋下市長には文楽への無理解と偏見が元もとあった。府知事当時、国立文楽劇場で文楽を鑑賞、内容を酷評して、「二度と見に行かない」と述べた。

毎日新聞夕刊編集部の戸田栄記者が『上方芸能』186号（2012年12月）に「文楽の今」を寄稿、次の言動を伝えた。

「文楽界の重鎮で人間国宝の竹本住大夫さん（88歳）は5月にインタビューした時、『300年の伝統に恥じぬようにと精進してきた文楽が、あまりに軽く見られておるんです』と憤りを隠せない様子だった。さらに6月、橋下市長は『特権意識にまみれた今の文楽界を守る必要はない』『恐ろしい集団だ』と言い放ったが、これはどう見ても理不尽な言葉だった」

都市格を高める条件の1が文化のストック、そのありなしであった。世界遺産の文楽は大阪が大切に守るべき文化のストックである。現代の中に伝統が生き永らえている都市のグレードは高い。パリにローマ、ロンドンやジュネーブの都市格が高いのは偏見に歴史的遺産としての文化のストックを豊富に持ち合わせているからなのだ。

公的助成をなぜ文楽が必要としているかを述べるには、文化への次の観点が共有されていてほしい。『上方芸能』184号で述べた「われら切られる側の論理—橋下徹氏の文化観批判」の拙文と重なるのをお許しいただくとして、私は次のように述べた。

文化には＜儲かる文化＞と＜儲からない文化＞の二種類がある。

概して、上質で芸術的、大人数を要する集団芸術のオーケストラやオペラ、バレエなどは＜儲からない文化＞なのである。文楽もこの部類に入る。人件費や制作経費や

維持費などをすべて入場料にかぶせると、平均的市民の所得では行きたくても行けない。だから公的助成することで鑑賞の機会均等を図るのである。文楽も同様である。

経済学の常識をいうなら、橋や公園、下水道などは「公共財」(public goods)であって、その建設や維持は政府や地方自治体の役割である。

しかし、＜儲からない文化＞の芸術文化は、市場で売買される市場原理の元では成り立たない。

たとえば、生産性を上げ、効率性を高めるといっても、オーケストラが一年間に演奏できる回数は 100 回から 120 回が限度とされる。なぜなら一回のコンサートに一日から二日のリハーサルが必要であり、オペラの場合は 10 日も続くことがあるという。これらを短縮すると、芸術的価値が損なわれる。

だから、経済学はこうした芸術文化を「準公共財」(semi-public goods)と規定し、市場経済の枠外で、政府や地方自治体が援助する。

上質の芸術文化に公的助成がなぜ必要なのかを明確にしたのはアメリカの文化経済学者、ボーモルとボーエンの共著『実演芸術文化の経済的ディレンマ』(1966 年)とされ、その根拠を次の三点にまとめている、と池上惇氏は『文化経済学のすすめ』(丸善ライブラリー)で紹介している。

- ①芸術文化活動の支援にあたっては、創造活動を公共機関が助成して、少なくとも公演の機会を与え、市場テストすなわち、大衆による評価の機会をつくること。
- ②観賞者が市場で芸術文化を選択する機会を均等に保障すること。
- ③未成年者の教育によって国民の享受能力を高めること。

こうした理論を元に公的助成はなされて

きたのだが、橋下市長は就任会見で次のように語った。

「自治体の文化行政が間違っている。根本から見直す。お金を入れたことの効果や狙いを検証したい。文楽は大切な伝統芸能だが、歌舞伎や落語は税金が入っていても根づいている」と。

市長の無知をあげつらうのではないが、落語と文楽には大きな違いがあるものだ。落語は、いわば個人経営の一人芸である。落語会に四人も五人も出演しても、同じ演目の部分を担うのではない。

が、文楽は太夫や人形遣いが一人では成り立たない。オーケストラやオペラと同様に集団芸術なのである。儲けるためには非常に高い入場料になる。となると既述したように鑑賞の機会均等が失われる。だから助成し、落語に比べての文楽の不利をサポートするのである。

それなら歌舞伎も文楽同様に集団芸術なのであって、しかし人気は高く、税金を入れてなくても松竹は儲けているではないか、の論法になるのだろうか。

だが、歌舞伎と文楽に違いがあって、同列に比較し、論じてはならないのだ。どこが違うのか？ 歌舞伎はスターシステムで興行されている。層の厚い東の歌舞伎は人気役者を次つぎ生み出しているし、老練な役者はその演技力で観客を堪能させる。実に、観て楽しむ芸能、それが歌舞伎なのである。

ところが、文楽は演目中心システムで興行されている。その演目を担うのは人形である。しかし、どれほど精緻な演技といえども人間には及ばない。文楽の音楽・義太夫節が他の語り物音楽である常磐津や清元に比べ、非常に写実的であるのは人形の不利、即ち、人間同様ではない表現力の不足を補うためなのである。つまり、その音楽

を聴いて楽しむ芸能、それが文楽なのである。

昔は大夫の巧拙が興行収入に響き、一座の命運と結びついた。ところが、文楽の困難は明治以降の音楽教育も手伝って、義太夫節を聴き分ける力が衰え、聴く芸能から見る芸能に変わったことである。それがまた文楽を存続させる変化にもなったのだが、文楽を維持する基盤は「聴く」から「見る」に変わったのである。

すると、男振りのいい役者、女以上に美しい女形が豪華絢爛な衣装で演技する歌舞伎に文楽は及び難いのである。

大阪市長選の最中、アメリカ村で橋下氏は街頭演説に立ち、若者相手に言うに事欠いて、「文楽を見たことのある人は手を挙げて」と叫んだとは、たまたま通りがかった信頼の置ける方から聞いた話である。

そこで手の挙がらなかったことを遺憾とするが、いわば魚市場で野菜を求めるに等しい尋ね方で、だから文楽には民意がない、と決めつけられては文楽は立場をなくすのである。

アメリカ村で手が挙がらなくても、文楽が大阪の財産であり、世界の財産であること疑うべくもない。だから、JR新大阪駅のコンコースには「義経千本桜」静御前の愛らしい人形が来訪者を迎えているのである。

これが大阪の誇る伝統芸能であり、いまでも擁する故の都市格、その高さなのである。

どういう都市にせよ、高い都市格を願う首長は、願いに見合う品格の高さを備えている筈だ。だが、橋下市長はかつてこう言い放って人々を啞然とさせた。

「こんな猥雑な街、いやらしい街はない。ここにカジノを持ってきたでどんどんパクチ打ちを集めたらいい。風俗街やホテル街、全部引き受ける。」(09.10.30 読売)

こういう考えをベースに持っておればこそ今、国内だけではなく国際的非難を浴びる従軍慰安婦容認発言はなされたといつてよい。この発言は大阪の恥にとどまらず、国政政党を率いる人物なればこそ、日本の恥辱とまで評されるようになったのだ。

大阪の都市格の低さは文化のストック、その貧弱さ故であった。にもかかわらず、国際児童文学館を廃止し、いわば大阪府立でもあった大阪(現・日本)センチュリー交響楽団への助成金4億3,000万円を全廃、大阪フィルハーモニー、ワッハ上方、各種文化団体への助成なども大幅に削減することで大阪の文化状況を困難に陥らせたのが、橋下府政、市政の文化行政といえた。

芸術団体に金は出すが口は出さない、これが行政的支援の原則であり、スポンサーシップの基本なのである。それがすぐれて上質な文化や芸術に敬意を抱けばこそ自然に生まれる謙虚な態度、かわり方なのである。そうではなく、上質の文化や芸術をコントロールし、意のままに操ってはファシストの専制支配と変わらないのである。

戦後のフランスで初代の文化大臣だったアンドル・マルローの次のことばこそ、政治家はかみしめねばならないと申し上げるものだ。

「国家は芸術を指導するために存在するのではない。芸術に奉仕するために存在するのだ。」